

# アグス 追悼 ～没後 10 年に寄せて～

草の根援助運動 (People to People Aid : P2)



アグス・ムリアワン

アグス・ムリアワンは、私たちと知り合った時は、インドネシアの名門・ガジャマダ大学の学生でした。P2の現地連絡員やツアーの通訳なども務めてくれました。また、学業に熱心な一方、スポーツに汗を流したり恋に胸を躍らせたりする、快活な青年でもありました。

1996年には、東京大学に一年間短期交換留学生として滞在して日本語を学びました。98年に色々な希望を胸に秘めてガジャマダ大学を卒業しました。この写真は、ガジャマダ大学卒業の日のアグスです。

アグスは、1973年8月15日、インドネシアのバリ島デンパサールに生まれました。アグスという名は、8月生まれだから、と聞きました。

大学卒業後、ジャーナリストとなったアグスは、スハルト政権崩壊などで揺れるインドネシアを精力的に取材しました。ジャカルタ市民たちの動き、軍隊との衝突、雨が降り出すと傘を貸してその日の食事の糧とするストリート・チルドレン……。アグスの撮影した写真が、日本のメディアで紹介されたこともありました。1998年には、日本のフリージャーナリストの集まりであるアジア・プレスの一員となりました。

1999年、アグスは、インドネシアからの独立をめぐる混乱の渦中にあった東ティモールに渡りました。そして、住民投票後の治安の悪化の中、各国ジャーナリストが避難した後も現地に一人とどまり、情報の収集・発信を続けていました。そして、9月25日、人々に食糧を届けに行く神父・修道女たちとともに独立反対派の民兵の襲撃に遭い、悲惨な最期を遂げてしまいました。享年26歳でした。

多民族国家であるインドネシアの中心はジャワ島です。アグスの生まれたバリ島は、エキゾチックなイメージで人気の観光リゾート地ですが、イスラム教徒が多数を占めるインドネシアの中



バリ・ダンス

では、ヒンズー教の盛んなバリ島は少数派に属しません。そのような中、華人系でカトリック教徒のアグスは、少数派の痛みを心から理解できる、心優しい青年でした。大学の卒業論文のテーマは、「アメリカ占領下における沖縄」でした。

礼儀正しく、茶目っ気もあり、日本語の力も抜群だったアグスは、どこでも人気者でした。東大での留学を終え帰国した後も、日本からインドネシアに留学する学生達の世話をしたり、また、日本の国際協力 NGO のスタディ・ツアーの通訳や現地連絡員をしたりして活躍していました。

2000年5月3日、世界報道自由の日にあたるこの日、アグス・ムリアワンの名前が、米国バージニア州アーリントンにあるジャーナリスト追悼記念碑に刻まれました。

また、同年11月25日、NHKスペシャルで「東ティモール『暗黒の9月』の記録～アグスが遺したビデオテープ～」が放送され、大きな反響を呼びました。

2001年3月、私たちはスタディ・ツアーの一行とともに、デンパサールにあるアグスの実家を訪れました。ジョグジャカルタからの飛行機が遅れ、御宅に着いたのは夜10時近くでしたが、ご家族はずっと待っていてくださいました。



アグス最期の日付

玄関に入ってすぐ正面に掲げてある、アグスの大きな写真が目飛び込んで来ました。花々の供えられた祭壇でした。何代か前のご先祖の写真とおぼしきモノクロの小さな写真も飾られており、アグスのカラー写真の真新しさが対照的で、言葉になりませんでした。

2002年10月3日、ご家族の手によってアグスの遺骨が東ティモール東部コム海岸で火葬され、同5日、故郷バリ島の海に散骨されました。

2009年8月、私たちは再度デンパサールのアグスの家族を訪ねました。ご両親をはじめ、兄弟姉妹、大勢の甥姪たちに会うことができました。みんな私たちがアグスを今も大切に覚えていることをとても喜んでくれました。アグスの甥の一人は流暢な英語で祖父母と私たちの通訳をしてくれて、将来は日本語も話せるようになりたいと話していました。その表情がアグスそっくりに思えて胸が詰まりました。また、私たちは東ティモールに行き、教会や独立記念館などを訪ねアグスのことを聞いてみました。どの人もアグスを知っていました。東ティモールの人たちは今でもアグスの思いをしっかりと受け止めているように思いました。

アグスの撮った最後の写真は、一面に咲き誇るひまわり畑でした。何枚も、何枚も。これらの写真を写しながら、アグスは、何を思っていたのでしょうか。まさか、死がこんなに間近に訪れていることを、はたして知っていたのでしょうか……

夏が来て、ひまわりを見るたび、アグスが思い出されてなりません。

もう二度と、かけがえのない大事な異国の友を、失いたくないと心から思います。



ジョグジャカルタ郊外・プランパナン寺院